

色んな人に告らせたい

マイケルみつお

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かぐや様の短編集です

かぐや様の長編も書いてます↓（https://syosetu.org/novel/289336/）
twitter↓@hanvanpan

目

次

白銀御行は告りたい
石上優には謝れない
四宮かぐやは惚氣たい

23 11 1

白銀御行は告りたい

それは始業前のある日の事。秀知院学園の生徒会長、白銀御行は日々の勉学とバイトによる疲労が溜まっていたのだろう。担任の先生が来るまでの間、机に突つ伏していた。

「まさか振られるとは……。絶対オッケーもらえると思つてたんだけどなー」

「（振られたのか。高橋のやつかわいそうに）」

まだ眠りに入つていなかつたためクラスメイトの会話が聞こえる。どうやらクラスメイトの高橋が玉砕したという話のようだ。

「（まあ俺は振られた事ないし。四宮も俺の事が好きだろうけどな）」あまり他人の恋バナというものを聞いた事がない白銀。自身も絶賛恋愛をしているという事から少し話が気になつた。白銀は若干の罪悪感を抱きながらもその話に聞き耳を立てる事にした。

「いやお前それ初耳。誰がどう見ても脈無しだろ……。やけに自信満々だと思つたら……。何か彼女に直接言葉で言われたりしたか？」

「いや、言葉じゃ何も……。つてかそういうのって言葉じゃなくて目線とか雰囲気とかで何となく分かるもんだろ！」

「（分かる。その気持ち分かるぞ！　ふと振り返ると目が合つたり、熱い視線を向けられているとか分かるもんな）」

白銀は高橋に同情した。しかし高橋の話し相手、山本の見解は違つたようである。

「はーお前なあ……。基本好きになつたら相手の事を都合の良いよう見つめてしまうんだ。俺達男はちょっとした事でも「もしかして俺の事が好きなのかな？」とか思つちまうもんなんだよ。だから直接言葉で言われない限りそういういた判断するなよ。その人の事が好きなら尚更な」

「（し、四宮も俺に対しても好き、とかは別に言つてないがそれで……も……）」

「そうだなー。俺も振り返つて考えてみたらちよつと童貞くさかつた

なつて今なら思うわ。サンキュー、山本」

童貞、という単語が白銀の心を貫いた。

「何……だと……」

白銀御行は大ダメージを受けた！

「（ほ、本当に四宮は俺の事が好きなのだろうか……）」

白銀は今朝のクラスメイトの会話が原因で今日一日ずっと上の空であつた。勉学を大事にし、生徒会長は全校生徒の模範たるべき！という強い信念を持った白銀が授業に集中できないくらいには動搖していた。

「（いや、動搖するな白銀御行。直接確認すればいいだけの話だ。……どうせいつかは告白しないといけないって事は分かつていたんだ。覚悟を決めろ！）

白銀はいつもとは違う、強い覚悟を持つて生徒会室に足を進めた。

「おへそ取られちゃいますー」

しかし肝心なところでチキンな白銀。いざ生徒会室でかぐやと相対すると折角固めた決意も揺らいでしまつた。……いつものように二人の関係に何の進展性もないまま今日が終わろうとしていた。しかし白銀の意識、目下の課題はそんな恋模様とは別のところに向いていた。

「電車が止まっている……だと……」

白銀はスマホで交通情報を入手する。白銀家に車などない。そして学校から白銀の家までは徒歩で帰れるほど近くもない。そして何よりこの問題が白銀にとって重要な理由は……

「やばいな、今日バイトあるんだよ。シフトに穴空ける訳にはいかないし……」

责任感の強い白銀にとつては由々しき問題であった。

「そうですよね。台風だからといって休むなんて社会人としてはあり

得ませんよね。日給より高いタクシーを使うか、誰かに乗せて行つてもらいうか……。社会人なら当然の選択ですよね」

かぐやはこの状況を即座に恋愛頭脳戦へと結びつけた。彼女の目的は白銀を自分の車に乗せて彼の家まで送迎……もといドライブデートをする事である。しかしそれを彼女の側から言えば……

「（それって私がデートに誘つてるつて事になるじゃない！）

……との事なので、その頭脳をフルに活用し、白銀の側から「車に乗せてくれ！」と懇願するような作戦を立案したのである。

「……ちよつと考えついでにトイレに行つてくる」

「（一番厄介な藤原さんも帰らせました。責任感が強い会長がバイトを休むという選択をとる事はないでしょう。そして守銭奴の会長が働いてお金を得るためにそれよりも多いお金を支払う決断などできなでしよう。さあ！ 私の車に乗せてくれと頼むのです！ さて、勝ちは確定しました。早坂にメールでもしましようか）」

一連のやり取りを受けて白銀が他に採れる選択肢はなかつた。彼女のプロファイルは完璧である。一言一句違えずに今の白銀の心境を把握していた。白銀は席を立つたが、かぐやの目的は達成されるだろう。……前提が変わつていないのである。

「つて！ 電車復旧してくるじゃない！」

「（なんでこのタイミングで？ もうちよつと頑張りなさいよ台風！ これを会長に知られるわけにはいきません！）

そもそも電車が復旧してしまえばドライブデートも、赤信号で「このままずつと青にならなければいいのに！」などといった甘酸っぱいイベントも、これまでかぐやが立てた計画も全てが水の泡になつてしまがあるのである。かぐやとしては白銀に電車が復旧した事を悟られる訳にはいかない。

「こうなればやる事は一つです」

かぐやは白銀のスマホのバッテリーを交換するという荒技を用いて、白銀がスマホを見られないようにと工作を始める。

「会長がトイレから戻つてくるまであとおよそ一分。この短い時間だけ私ならできる！」

もう犯罪行為なのだが……しかし恋する乙女は無敵なのである。かぐやはその持ちうる才能の全てをこの一分にかけていた。

「（ど、どうする……？　バイトに穴は開けられない。四宮に頼むか……？）」

白銀はトイレなどには行つていなかつた。生徒会室を出て、誰もない廊下で頭を抱えていたのだ。

「（いや、これじやあ俺がド……　ドライブデートに誘いたいと言つてるみたいじやないか！）」

その選択肢を相手に採らせるためにこの半年、かぐやと白銀は恋愛頭脳戦を繰り広げてきたのだ。今更自分からその選択を採れる訳がない。そんな簡単に採れるのならこんなにも拗れていない！　そして……もし採つてしまえば、ここで自分がかぐやに頼めば、これまでの半年は無駄となり自身の敗北が決定するという事を白銀は理解していた。

「（だが……　どの道今日言うつもりだつたんだよな）」「

ここにきて白銀は自ら固めた決意を思い出す。……　ここらが潮時かもしけない。

「（そうと決まれば！）」

このまま考え方続けてもまた決意が鈍るだけだ。白銀は走つた。自分の想いを、そのまま生徒会室に一人いるかぐやに伝えるために。このまま考え方続けても自分の決意が鈍るだけ。それを分かつていてから一心不乱に、ただ何も考えずに来た道を走つて戻つた。が……「しのみ……や……？」

トイレなどせず走つて戻つたからか、白銀が廊下にいた時間は一分も経つておらず……　白銀と一心不乱に彼のスマホに対してドライバーを振るうかぐやが相対してしまつた。

「早坂ー！」

四宮家別邸。あれから白銀とかぐやはお互いに何を話したらしい

か分からず無言のままそれぞれ帰宅した。かぐやは帰宅後、自らの近侍に泣きついていた。

「事情はわかりました。十中八九かぐや様が悪いです。もう本当の事を話すしかないんじゃないですか？」

「それじゃあ私が会長をドライブデートに誘いたかつたって事で……それもう告白じやない！」

「だからもうそうすればと言っています」

早坂愛。代々四宮家の使用人の家系に生まれ、現在四宮かぐやの近侍を務めている女子高生である。主のかぐやの今日の大失態を聞いて……

「（もうこれ告白するくらいしか誤解解く方法ないでしょ……）」

と思つていた。

「あーもう本当にダメダメですね。どうやつたらここまで下手を打てるんでしょうか」

加えて最近主が恋愛方面で驚くほどにポンコツであるという事がかなりの負担を強いられており、彼女のストレス値は驚くほど高騰している。そのストレス発散も兼ねてか、使用人の身分ではあるまじき悪態を彼女についた。

「……早坂だつたら会長を落とせるって言うの？」

「まあおそらく」

まさしく売り言葉に買い言葉。しかしそのやり取りはかぐやの中の絶対に超えてはならない一線を超えてしまったようで……：

「言つたわね！ ならやつてみなさいよ！ 早坂にかかるばどんな男もイチコロつて言うなら会長も一日で落としてみなさいよ！」爆発してしまった……。

「イチコロとは言つていないです」とかぐやの発言を訂正する早坂であつたがその言葉はかぐやには届かず、かぐやは自分の苦労をノンストップで喋り続ける。

「口ではいくらでも言えますからね。大言壯語も程々にして欲しいわ！」

最初は無理難題を押し付けてくる主に対しても少し意地悪をしてや

ろうといった軽い気持ちからの発言であつたが……

「……かぐや様がやれと言うのならやりますが？」

「やれるものならやつてみればいいわ」

普通にかぐやの発言にイラついたのか、割と本気で白銀を落とそ
と準備に取り掛かり始める早坂であつた。

白銀御行を落とすため、早坂愛はスミシエ・ハーサカに変装し、学
校近くの本屋を訪れていた。

「（白銀君が今日、参考書を買いに本屋に寄る事は既にかぐや様に命じ
られて調査済みの事です。この後バイトがなく時間もあるという事
も。……冷静に考えて何で私はこんな事を……。しかし昨日の
かぐや様の発言には普通に腹が立つたので命令通りに白銀君を落と
してみせましょう。かぐや様は少し反省するべきです。丁度白銀君
の後ろに並ぶ事に成功しましたね。それでは……。作戦開始です）」

「あ！ やつぱり白銀君だ！」

聞き覚えのある声。後ろから肩を叩かれたので白銀は振り返る。

「ああ。確か四宮のとこのメイドさんのスミシエ・ハーサカさん、だつ
たか？」

白銀は数日前にこの擬態の状態の早坂と出会っていた。「白銀御行
と会話する」第一閥門、まずはクリア。

「ピンポーン！ 覚えてくれたんだ！」

「いや、前の時と雰囲気違つたから一瞬分からなかつたよ」

いつもと完全に違う、猫を被つた状態で早坂は更に会話を進める。
「それにしても日本語上手になりましたね」

「猛特訓したから！ 白銀君こそ本当に勉強熱心なんだね！」

当たり前だが早坂は日本で育つたため日本語など最初から習得し
ている。そんな中、白銀は彼女がパソコンに関する本を数冊か持つて
いる事に気がつく。

「パソコンの本を探してますのか？」

「ノートパソコンを買おうとしてるんですけどね。あ、そうだ！ こういうのって男の子の方が詳しいって聞きますしよかつたら教えてくれませんか？」

早坂は巧みな会話テクニックと、人間が持つ「他人に教えたい」という欲求を利用する。そしてカフェエテリアで白銀と隣り合わせのカウンターに着席する事に成功した。その様子を……

「か、会長……！」

どうしても様子が気になつたために着いてきたかぐやが建物の陰から見ていた。周りから見れば若干……いやかなり行動がストーカーのそれであるのだが。

かぐやは後悔していた。何が楽しくて自分の好きな人と部下がイヤイチヤする様子を見せられなければならないのか。かぐやが早坂に一言謝るだけでこの茶番もすぐに終わるだろう。かぐやからの謝罪さえあれば、早坂が白銀を落とす動機は今のところない。

しかしかぐやは謝罪する気はない。一度言つた事を曲げたくない！ というか……正確には早坂に謝りたくない！ というか……何だかそれじやあ自分の負けを認めたみたいじやない！ とか……とにかくかぐやは負けず嫌いだったから。それに白銀が自分以外の女性に靡く事はないだろうと確信していた。かぐやには正妻の余裕といった安心感があつたのだ。だが実際はどうだろう……

「ねえ、白銀君。試しに私と付き合つてみない？」

白銀への告白という、まだ自分もやつた事のない行為を早坂に許してしまった。

白銀は嬉しかつた。勿論これまで誰かに告白をされた事がないという事もある。しかしクラスメイトの話からきちんと言葉にして伝えるという事を意識し、ずっと悩んでいた。何か裏心があつたとしても直接言葉にして好意を伝えてくれた事が何より嬉しかつた。

「……ありがとう。すごく嬉しい」

想いをストレートに伝える事を考えてきた白銀。やはり飾らず自分の想いを伝える事が肝要だと思い直す。だがそんな嬉しい告白も、白銀は受け入れる事ができない。

「ちょっと話してみて思つた。勘違いだつたら本当に申し訳ないんだが……ハーサカさん。本心じや別に俺の事好きじやないだろ？なんか演じている気がして」

「…………」

早坂は自分の演技に自信があつた。白銀に悟られる訳がないと思つていた。

「（一体どこでボロを出してしまつたのでしょうか……）」「何にせよ、演技が見破られたという事はかぐやからの指令、「白銀御行を落とす」という作戦がこれ以上遂行不可能だという事、つまり失敗を意味する。その事を建物の陰からこちらを監視していたかぐやも分かつたのだろう。勝ち誇った顔をして鼻歌を歌いながら去つていつた。

「演じるのは好きじやなかつた？」

もはや早坂の頭の中から「白銀御行を落とす」という思考は消えている。

「まあ……。素で接してくれる方が嬉しい」

「嘘よ」

任務とは関係なしに早坂は白銀に尋ねくなつた。純粹に意見を聞きたくなつた。

「人は演じないと愛してもらえない。弱さも、醜さも演技で包み隠さなければ生きていけない。赤ん坊だつて本能で分かつてゐる。ありのままの自分が受け入れられる事などあり得ない」

『四宮』という、人間の汚い部分を知り尽くしてゐるのは何もかぐやだけではない。近侍の早坂もその一人である。早坂もかぐや同様、他人に対して絶望しているのだ。でも主が惚れ込んだ白銀ならばもしかしたら違うかもしれない、と一縷の望みを抱いて尋ねているのである。

「そんな事は……」

「だつたら、君は見せられるの？ 背伸びも虚勢もなく、弱さも全て隠さない、本当の白銀御行を」

そう言うと白銀は言い返せないのか、顔を俯かせてしまう。

「……確かにそなのかもしれない」

「(やっぱり彼も違うのですね……)」

勝手に他人に期待して勝手に裏切られたような……。そんな事を思つてしまふ自分に早坂は自己嫌悪を覚える。しかし白銀の言葉はそこでは終わつていなかつた。少し前までの白銀だつたらここで沈黙していたのかもしれないが……。今の白銀は違つた。

「でも自分のそんな弱い部分も、醜い部分も全て曝け出せる相手が見つかれば、見せてもいいと思える相手が見つかればそれでいい。早坂の言うとおり、全ての人に好かれる事はできないのかもしれない。それでも相手の事を知りたいとお互いが思い、自分の事を知られてもそれでいいと思える相手がいるのなら、俺は弱さを見せられる」

そこには言葉で伝える事を考え続けた白銀の確かな答えがあつた。

「早坂は四宮の専属メイドなんだな」

「はい。先程は嘘をついて申し訳ありません」

「別に気にしてないぞ。それに俺たち、友達だからな。そんな畏まつた口調をしなくていい」

「友達、ですか」

「ああ。早坂がどう思つてゐるのかは分からぬが、俺は早坂に自分の弱さを見せた、いや出せた。だからと言つて早坂にそれを求めてるわけではないがな。俺が勝手に親しみを持つてゐるだけだ」

「(何だろう、この気持ちは。自分の弱さを見せたからだろうか？ 学校でも常に張つてる虚勢を脱いで人と話しているからだろうか？ 初めて感じる気持ちだ)」

「白銀君。また会えない？」

「……いいぞ。」

白銀は早坂に對して、早坂も白銀に對して最初とは違つた感情を抱いていた。しかしこれが恋なのか、二人には分からない。むしろ色々なものを抱えた二人にとつては恋でない方がいいのかかもしれない。だから恋という気持ちと向き合わずに二人は仲を深めていった。

「四宮と話している時より楽しい……」

二人がお互いの気持ちに気づくのはもう時間の問題である。

石上優には謝れない

「お前学校来るなよ！」

「お前の席無えからｗｗｗｗ」

石上優はいじめられていた。それも無実の罪で。しかし彼の心はそれでも折れる事はなかった。家にも居場所はなかった。教室にも居場所はなかった。しかし彼がこれまで生きてこれたのは…

「お！ 石上来了な。」

「石上くん、こんにちは。」

「いつしがみくくん！ 遅いですよ～！」

「どうせまたゲームしてたんでしょ。」

生徒会という居場所のおかげだつた。しかしその平穏は突如として崩れる事となる。

それはある日の昼休み。ある生徒は弁当片手に学友と談笑し、またある生徒は勉学に勤しんだりと各々が自由に過ごす事ができる時間である。そんな中、石上優はいつものごとく昼休みに入つた瞬間に教室を飛び出していった。教室に残っていても意味がない。むしろ居心地が悪い。今日も事前に買っておいたパンを片手にゲームをしようと昼間にはあまり人が通らない特別棟へと足を進めた。しかし…

「充電切れてる…。」

石上優、重大なミスを犯してしまう。いかにゲーム機のバッテリーが進化し、自身も玩具会社の社長の息子といつてもバッテリーが切れたゲームで遊ぶことはできない。石上は今にも溢れようとする涙を堪えながらゲーム機をポケットへとしまう。元々石上は小食な方であり食事もゲームのついでのような感覚であつたため持つてきただパンの量などたかが知れている。あつという間に文字通り、手が空いてしまった。

「あ、そういうええば…」

石上はゲーム機のバッテリーをバツグに入れていた事を思い出した。教室に戻る事は憂鬱だが背に腹は代えられない。石上は立ち上がり教室へと向かい出した。

「え？」

石上は教室に戻つてその雰囲気の異常さに気づいた。教室に入つた瞬間、そこの人間が一斉に石上の方を見る。普段からいない人間のような扱いを度々受ける石上だが別に視線を集めることがなくもない。ただ今回違つた事は…

その視線が嫌悪や侮蔑ではなく困惑だという事である。

石上は荻野から大友を守つた。しかし誤解され無実の罪で糾弾され攻撃され続けた。それでも彼が沈黙を守り続けたのはただ純粹に大友を守るためだつた。別に好きだつた訳じやない。ただ自分の正義感に蓋をする事ができなかつただけ。見てみぬふりができるなかつただけ。そしてどれだけ自分が苦しんでも大友は荻野の事など疑いもせず幸せに生きている。複雑に歪んで絡まつた感情だが彼女が眞実を知らない今まであるという事実がある種、石上のこれまでやつてきた事の証明となつていた。

「ねえ、石上。これつて本当なの？」

だが石上は見落としていた。荻野は徒党を組み多くの狼藉を働いてきた。そう、被害者は大友だけではないのである。だからクラスメイトの小野寺が差し出したスマホに書かれているように大友以外の被害者が名乗りをあげたのであればそれは大友の耳にも入るはずなのである。

目の前が真っ暗になつた。こんな感情はある時以来だろうか…。小野寺に対してもういつた返答をしたのかすら思い出せない。なんで今更謝罪なんてしてくるんだよ！僕はただ逃げるようトイレに

籠る事しかできなかつた。

用を足す事もせず、ただ果然と座つていると聞き慣れたクラスメイトの会話が聞こえてくる。

「石上、許してくれないよな。」

「そりやあ… そうだよ。俺たちはあいつに対してひどい事をしたんだ。」

なんで今になつて優しくしようとするんだよ！ なんで！ どうしてバレてしまつたんだ…。誰も知らず、知ろうとせずにいてくれたら、僕だけが真実を墓場まで持つていけばよかつただけなのに…。

僕は人生を懸けて、大きな痛みを受ける事も覚悟した。大きな犠牲を払いながらも自分の正義感のための一連の行為は… 失敗に終わつた… 僕には何も残らなかつた… 僕は何も成し遂げる事ができなかつた…。

「あら石上君。今日は早かつたですね。」

気がつくと昼休みはとつくり過ぎていて放課後に突入していた。僕は五限と六限が過ぎて、いるのにも気づかず一人トイレで泣き続けた。そしてそれから日々の習慣となつていたからか何も考えずとも足は生徒会室の方にへと向かつていた。

「ちよつとお話を…」

「みんなで合コンゲームしましょう！」
「えつ…」

伊井野と藤原先輩は置いておいて会長に相談したかつたんだけど…。でもまあ教室の連中と違つて何も変わらず接してくれるつてのは心地いいな。会長達も学年が違うから僕の事もまだ耳にしてないだけかもしけないけど。伊井野は知らんが。「十円玉ゲームをしようと思います！」

藤原先輩がその提案をし、みんなにルールを説明していく。なんでも質問をしてそれをコインの表裏にて回答するというもの。匿名性を担保しつつしかし誰がその回答を行ったのだろうと場が盛り上がりゲームなのだ。正直合コンとか行つた事ないし、でもそんな事藤原先輩に言つたらなんか言われそうだな。今の僕の精神状態なら切り返せるか分からない。

「いいですかー嘘はダメですよー。このゲームは誰か一人でも嘘をついたらグダグダになつて面白くなくなるんです！だから一応嘘発見器も持つてきたので！」

「「「え？」」」

かくして嘘の許されない十円玉ゲーム、スタート。

「じゃあ私からいきますねー！ぶっちゃけ今、恋してるって人はYES！してない人はNOでお願いします！」

「そのレベルの質問?!」

藤原先輩のいかにも合コンっぽい質問だなと思いながらも会長がそれにツッコむ。恋愛…か。多分つばめ先輩の事が僕は好きなんだろけど…。正直僕なんかじや付き合える訳ないし…最初からこの恋は始まつてもなかつたんだ。裏、だな…。

「みなさん出しましたねーそれじゃあシャツフルして…と。えーっと結果は…二人！」

「え！一人も？誰？誰？」

「会長！特定行為は禁止ですので！答えが分からぬモヤモヤとドキドキ、これが十円玉ゲームの楽しいところです！」

この何とも言えない空気が楽しいところ、か。やっぱり僕にはよく分からぬ。みんなとズレてるんだろう…。

「じゃあ石上君！次いっちゃんしよう！」

藤原先輩に指名された。何ともいえない空気が楽しいのなら…

「ぶつちやけ僕の事嫌いじゃないって人はYES。嫌いって人はNOを出して下さい。」

お、場がいい感じに白けている。それにこの生徒会の皆さんだからこそ安心して聞ける事だ。

「えー結果は… 全員コインの裏です！みんな石上君の事分かつてるとですかね！」

「え…」

「裏つてNO… つまり嫌い。みんな僕の事を分かつていて裏…。

「すみません。死にたいので帰ります。」

「えつ？あ、おう。」

え？何で？会長… 四宮先輩… 藤原先輩… 伊井野は普通に分かるが…。

「そうか… 僕はみんなから嫌われていたんだ…。」

思い出せば教室ではゴミのような目で僕を見るクラスの奴ら。どの教師も僕が悪いって決めつけて一方的に怒鳴り続けられる毎日。家に帰つても。そして生徒会のみんなも…。いや、僕が悪いんだ。僕が真実を話さなかつたから。どうしようもない正義感と自己満足で周りに迷惑かけて、そんでもってそのツケが自分に返つてきただけじゃないか。因果応報、自業自得。ただ自分が悪いのに生徒会のみんなを巻き込んで…。僕を生徒会に入れる事で色んなからの人からの色んなものを失つたかもしれない。会長なんてただ混院だ、つて理由であれだけ成果を上げてもまだ反対の勢力は存在する。それを僕の存在が助長させたかもしれない。役立たずは捨てていけ、現実が見えていないのは僕の方だつたんだ。

僕のせいだ。学校も家も生徒会も。居場所を無くしたのは純粹に僕のせいだ。他の誰も悪くない。僕の事が嫌いでも会長達が僕の恩人である事には変わりない。そんな会長達を悪く思うなんてしたくない。…それでも

「もう… 限界だ…。」

「合コンゲームしましょう！」

やつぱり四宮のあの事聞かれてたよな…。それが気になつてさつきから大量に送られてくる学校からの書類にも日が通せていない。

「十円玉ゲームをしようと思ひます！」

藤原はあの時四宮と一緒にいた。つまりこれは四宮に何らかの罠が仕掛けられている可能性が高い、いや確実に罠が仕掛けられているという事だ。

「だから一応嘘発見器も持つてきたので！」

「「「え？」」」

嘘発見器だと?!にわかに信じられないがしかし四宮が用意したものだ多分。なら効果は本物だろう。考えろ！四宮がこれでどうするつもりだ！

「じゃあ私からいきますね！ぶっちゃけ今、恋してるって人はYES!してない人はNOでお願いします！」

嘘発見器がある以上、迂闊な嘘は自らの首を絞める結果になるか…。YES、だな…。

「みなさん出しましたね、それじゃあシャツフルして…と。えーっと結果は…二人！」

ん？これは…藤原に渡されたコインの製造年が全て違う…。つまり製造年で誰がどの答えを出したのか特定する事ができるという事だな！じゃあ次の質問で仮に四宮が「私の事が好きな人はYES」とか言つてきたら詰みじやないか！…よし、他にあるのと同じ昭和五十六年の硬貨が運よく財布に入つてくれた。際どい質問をされたらこれで切り抜けよう。

「…僕の事嫌い…人はYES…人はNOを出して下さい。」

考え方事に没頭していくよく聞こえなかつた。だが石上がまたネガティブな事を言つたのは分かつた。どうせ「僕の事が嫌いな人はYES」とか言つたんだろ？俺たちがお前の事嫌いになるわけないだろ？当然NOに決まつてるだろ？

会長を嵌めるためにわざわざ違う製造年の硬貨を藤原さんに使わせました。さて、会長はどのような対応をするでしょうか。会長の予測抵抗パターンは何種類も既にシユミレーション済みです。すごいわ！こんな簡単に会長を追い込む事ができるなんて！尻軽達が好んでやるゲームなだけあるわ！

「…僕の事嫌い…人はYES…人はNOを出して下さい。」
ついつい考え方をしていて聞こえませんでした。しかし石上君はどうせまた「僕の事が嫌いな人はYES」とか言つたんでしょう。全く、そのように卑屈では前に進めませんよ。当然NO、です。

「えー結果は…全員コインの裏です！みんな石上君の事分かつて
んですからね！」

藤原さんの男を誘うような、媚びるような声が響いて全員がNOに投票した事が分かります。ほら、誰もあなたの事は嫌ってないのですよ。…てつきり伊井野さんはYESに入れると思っていましたが。でも石上君はその結果を見ると絶望した表情を浮かべ、「すみません。死にたいので帰ります。」

そう言つて帰つてしましました。もしかして… YESとNOが逆だつたかしら…。では伊井野さんはそのまま投票して私と、おそらく会長も気づいたのでしょうか、考え方をしていたので聞き逃してしまった。そして藤原さんは…まあ間違えたのでしょうか。藤原さんは色々と間違えているのですからコインの表裏くらい間違えても不思議ではありません。それより明日、石上君には何かしてあげまないとね。さて、それよりこれからどうやって会長を追い詰めるか。思考を働かせなさい！四宮かぐや！

私は気づいてしまいました！この硬貨、製造年が全部違います！つまりそこさえ見ていれば追求せずとも誰がどの回答をしたのかが分かるという訳です！なんて天才なのでしょう！ラブ探偵千花がここ最近生徒会室に漂うラブの気配を見抜いてみせますよ！

「…僕の事嫌い…人はYES…人はNOを出して下さい。」
あ、考え事をしていて聞き逃してしまいました。でもところどころ

聞こえた単語からどうせ「僕の事が嫌いな人はYES」とか言つたんでしょ石上君。全く石上君はもう…。当然NOです！

「えー結果は… 全員コインの裏です！みんな石上君の事分かつてりんですかね！」

よかつた。NOが石上君を嫌いじやない、で合つてましたね！ちよつと不安だつたんですよ。でもこれで石上君も分かつたでしょ？ここにいるみんな石上君の事嫌いじやないんですよ！

「すみません。死にたいので帰ります。」

え？何で皆さんNOに投票しているんですか？藤原先輩も！てつきり私だけだと思っていたのに…。というか石上のあの様子、普段とちよつと違うような。そういうえば今日、教室で石上に対する視線が違つたわね。

「ちよつと先輩達、気になることが失礼しますね。」

そう言つて私は生徒会室を後にした。

「ねえこばっちゃん。今日石上の様子が何かおかしかつたんだけど何か知らない？」

「え？ミコちゃん知らないの？ああ… ミコちゃん昼休みいなかつたしその後はあんまり話してないししようがないか。実はね…」

そこで私は石上の中等部時代の事件の真実を知つた。

「あれ？それは？」

こばっちゃんが持つてる紙がつい気になつて尋ねる。

「ああ、これはなんか石上が書いてたものらしくて。ほら、夏休みの読書感想文、石上賞とつたでしょ？で、それが今日返つてきたらしくて私が石上に返すように先生から頼まれたの。」

「ちよつと見せて。」

「別にいいけど。」

こばっちゃんの許可ももらつて私はその文を読む。

『… こうして主人公の努力は…』『… いざれ報われる。そう私に教えてくれて…』『… 君主であつても…』『… それはいつかの…』

「嘘…。」

見間違える筈がない。それは、その文字は…：

「ステラの人との同じ文字だ…。」

中学の時周りに疎まれて一番苦しかった時に私を助けてくれた…：何も見返りを求めないあのピュアな優しさのステラの人と似ている、なんでもものじやない。

「… 石上がステラの人だつたの…？」

「えー結果は… 2人でしたー。」

「お前もか！」

石上と伊井野が途中で抜けたのでもう俺と四宮と藤原しか残っていない。そして四宮の罠を完全に看破した俺が最後の詰めに入ろうと思ったが藤原お前もか…。そう思つていた時！

「白銀会長！」

扉が勢いよく開けられた。

「伊井野が、どうした。」

「今日、学校側から届いた書類、確認しましたか？」

「いや、まだだけど…。」

今日は四宮の対処で頭がいっぱいだつたからな。まあ今から業務に戻ろうとは思つていたが。

「なら早く確認して下さい！」

こんなに焦つた伊井野は初めて見るな。

全く、騒がしいですね伊井野さんは。

「これは本当か……？」

「会長、どうかされたんですか？」

会長の顔が真っ青になつていらつしやる。そして手渡された書類に目を通す。そこには一年前の事件の内容が書かれており、先日の体育祭で何も知らずに石上君を罵倒していた大友京子に関わる事件が。

「私が十円玉ゲームをやろうだなんて言つたから……」

違うわ藤原さん。あなたを焚きつけたのはこの私。

「会長。」

「ああ。いつもならともかく今日は心配だ。各自、石上を探そう。」

こうして職員室が大騒ぎになつてから数時間経つた後、生徒会室も慌ただしくなり始めた。

「石上は?!」

「家には帰つていませんでした。」

「あいつが立ち寄りそうなゲームセンターとかにもいませんでした。」「校内を探しましたが石上君の姿は見当たりませんでした。」

「どこだ！どこにいるんだ石上！その瞬間俺は石上の言葉を思い出してしまった。『死にたいので帰ります』。やめろ！なんて想像してんだ俺は！どこだ！他に石上が行きそうな場所は！」

「……そ、それは本当なのですか早坂。」

「四み……や……」

四宮の携帯が鳴つた。会話の内容からして相手はおそらくハーサ力だろう。しかし問題は会話を始めてから。四宮の様子が急変した。俺はこの四宮を知っている。一年前、俺たちが初めて会つた時の四宮だ……まるで氷のようだ……。

「……目撃情報がありました。今から1時間ほど前、一人の男子高校生が崖から身を投げたと……その男子生徒は秀知院の制服を着てお

り…ツ！首に…ヘッドフォンをつけていたようです。」

「あ、ああああああああああ。」

四宮先輩の話を聞いてからどれだけ時間が経ったのか分からない。
石上は…ステラの人は…私をいつも助けて、支えてくれた人を私は救えなかつた…。

「俺がちやんといつも通り業務を行なつてあの書類を早く確認していれば…」

「石上君は私たちに何か話があるようでした。それに応えていれば…」

「私があんな提案なんてしなければ石上君は…」

みんながこんなに悲しんで…こんなに涙を流しているのにあんたの事が嫌いな訳がないじゃない！見返りを求めるその優しさに私は救われた。それから私はあんたを色んなところで助けてきた。でもそんなあんたは私に何の感謝もしなかつた事からあんたに怒つた日も少なくなかつた。でもあんたがあのステラの人なら…今ならこばつちやんが言つた事が分かる気がする。きっとあんたも私を助けてくれてたんだ。イヤホンが抜けてた時もそう、あんたは自分が泥を被る事で私を助けようとしてくれてたんだ。それを私が気づかなかつたからで…。遅くなつたけどごめんね石上…。私を助けてくれてありがとう。

「目は覚めた?」

「あ、ええと…あなたは!」

「何であんな無茶をしたの!後少し発見も何もかもが遅くなつたら死んでたのよ!」

「でも僕は…」

「色々と聞いたわ。でもね!私は優の事嫌いじゃないわ!」

「先輩…。」

「だからもう一度とこんな事しないで…。」

「…。」

「第一!おばさま達が優の事嫌いになるわけないでしょ!御行もそんな人じやないって!でもそう考えてしまうくらい追い込まれてたんだね…。」

「ツ!」

「私は優にいなくなつてもらいたくなかった。何か辛い事とか悩みとか話してくれていいから!優だつて今まで私の悩みとか聞いてくれたし。」

「…ありがとう。マキ先輩。」

四宮かぐやは惚氣たい

それは秀知院の文化祭、奉心祭の後の話。

「早坂知つてる？ 初キスがレモンの味つてのは嘘なのよ！」

かぐやの様子は普段とまるで違う。彼女はつい先ほど学園の屋上、後夜祭の時に人知れず想い人の白銀御行と結ばれた。そして念願のキスまで。今の彼女は恋愛脳が全てを支配したいわばアホである。

「そ… そうなんですか？」

その惚氣を聞いているのは早坂愛。彼女は恋に憧れておりそして主の恋愛頭脳戦で度重なる活躍をしてきた女である。主とその想い人が結ばれた事を心から祝福し、そしてその生々しい話に内心ドキドキしながら耳を傾けている。彼女もまた、恋に恋する乙女なのである。

「会長はちよつと前までアメリカンドッグを食べていたからケチャップの味がしたわ！」

数刻前まで大して変わらなかつた筈なのにもうかぐやは早坂よりもずっと遠くまで行つてしまつたのだとの時早坂は思った。

「でも少し手間取つたわ！ 唇を合わせるまでは大変なのですがその後が大変で！」

「ちよつと待つて下さいかぐや様！ キスとは！ 唇を合わせるのがゴー！ その先なんてないんです！ 一体何をしたんですか？」

話のあまりの飛躍にかぐやと早坂はドアがノックされた事にも気づかない。

「あらあら！ 早坂は何も知らないのね？ いい？ 恋人同士がするキスつてのはね？」

「失礼します。お嬢様、本家——」

「唇を合わせながらこう… 舌を絡ませてやるのよ！」

影島は四宮家に仕える近侍である。主のかぐやは異性であるため同僚の早坂ほど距離は近くはないがそれでも良好な関係を築いている。かぐやも早坂もできないような事を彼は担ってきた。そして

彼も、かぐやの恋愛頭脳戦を支えた一人である。そして先ほど、四宮本家から遣いが来た事を知らせるためにかぐやの部屋をノックした。が、返事がない。もう一度ノックをするも…やはり返事がない。「（ヘッドフォンで音楽でもお聞きになられてるのだろうか…？）しかし緊急性は低いが必要性のある事柄。彼はドアノブを引いて主の部屋へと入った。

「失礼します。お嬢様、本家——」

本家の遣いの方がいらっしゃってます、と最後まで言葉を紡ぐ事ができなかつた。なぜなら…：

「いい？ 恋人同士がするキスつてのはね？ 唇を合わせてこう…舌を絡ませてやるのよ！」

どう考えても異性の自分が聞いてはダメな内容だったからである。「失礼しました。話が終わりましたら居間にお越しください——」

「逃がしませんよ影島」

即座に踵を返して撤退しようとしたが早坂に腕を掴まれ失敗に終わる。

「あ！ 影島も聞いて！ さつき会長とね！」

早坂はこの羞恥に自分一人では耐えられないと思い、そしてかぐやは異性であろうが信頼している影島にも惚氣たいと思い、影島の来訪を歓迎した。そして影島も併せてかぐやの惚氣談は再開する。

「だからこう、お互いの舌を絡ませあつたらすぐ幸せなのよ！」

「~~~~!!」

そのかぐやの惚氣に早坂は最早羞恥で赤くなつていた。一方三人目の参加者の影島は…：

「（えっ？ それだけ？ 早坂が真っ赤になるほどだからもつと…それこそ突つ込んだ内容だと思ったけど）」

この男。かぐやや早坂と違つてピュアではない。二人は知らないがかぐやが言つた内容など数年前に経験している。そしてその先も既に。

「影島君。遅い… つてどうしたんですかかぐや様」「ママ?!」

影島が言つた本家の遣い。それは早坂奈央。早坂愛の実母である。

「あら！ 奈央さんも来ていたのね！ 聞いてくれる？」

かぐやの思考は幼児レベルに退化している。早坂や影島にしたよう

に惚氣てマウントを取ろうとする。

「あら、初々しいですね。それなら——も——も既に？」

「えつ？」

「——とか——とかも付き合いだしたらしますよね？ かぐや様は——

——の経験は？」

「えつ？」

レベル5の勇者が魔王に挑むが如くのレベルの差。散々人を赤面させてきたかぐやだが明らかにレベルの違う猥談に着いていけず赤面する側となる。尚、この小説はR—18ではないため奈央の発言は一部音割れしている。

「お嬢様、やっぱリアホですよね。子持ち既婚者相手にマウント取ろうだなんて。早坂がいる時点で早坂のお母さんはそれ以上の事を既に経験してるのは確定なのに」

「やめて。人の親のそういう事を考えさせないで」

本日の勝敗 かぐや、早坂の敗北